

## 報告1

秦漢都城の時代性——漢長安城を中心に——(国際シンポジウム 中国都城考古学の最前線3  
——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展——)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 劉, 振東, 趙, 君儒, 佐川, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000308">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000308</a>

# 報告1 秦漢都城の時代性—漢長安城を中心に—

劉 振東（中国社会科学院考古研究所西安研究室・主任）

秦が六国を滅ぼして統一した後、都・咸陽は旧都を踏襲し、始皇帝は「渭南（渭水の南）」で大いに土木工事を興し、信宮と阿房宮を建設したが、渭北の咸陽城の空間的な配置は大きく変わらなかったようである。前漢の都・長安は秦の都・咸陽の「渭南」離宮に基づいて建設されたので、秦の宮殿の配置の影響を受けたのは当然のことである。後漢の都・洛陽も、秦漢の旧城を改築したものである。秦漢三都は多かれ少なかれ戦国時代の都城構造の影響を受けており、それが秦漢都城の時代性を形成する要因の一つである。

## 一. 漢長安城遺跡の概況

### 1. 史料から見た漢長安城の造営過程

『史記』や『漢書』の記載によると、漢高帝二年（前205年）に（南郊において）漢の社稷を立てた。五年には長安県を設置し、「長樂宮を治めた。」七年には「長樂宮が成り、丞相已下は徙りて長安に治した。」七年（或いは八年）に「蕭丞相が未央宮を営作り、東闕・北闕・前殿・武庫・太倉を立てた。」九年に「未央宮成ると、別に北宮・大市を立て、太上皇廟を建設した。惠帝元年（前194年）に「初めての城、六年に成る」（或いは五年）。六年には「長安に西市を起こし」、さらに高廟も建設した。文帝は城外の東郊に長門籍田を開き、長門五帝壇を立て、顧成廟を建て、北東郊に渭陽五帝廟を作った。武帝は城内に北宮と桂宮を建設し、太初四年（前101）に「明光宮を起こし」、城外の南西郊に上林苑を広く開いた。元狩三年（前120年）には「謫吏を發して昆明池を穿ち」、太初元年（前104年）には「建章宮を起こし」、また南郊に博望苑を立て、南東郊に薄忌太一壇を立て、東郊には長門宮を改築した。宣帝は東郊に奉明県を設け、南郊に樂游苑を設けた。さらに「又た歳星・辰星・太白・熒惑・南斗を立て長安城の旁に祠る。」成帝は建始元年（前32年）に南郊に園丘、北郊に后土祠を立てた。平帝はもともとあった閭里をもとに、「又た五里を長安城中に起こし、宅二百区をなし、以て貧民を居らしめた。」元始年間において、南郊に官稷を立てた。元始四年（4年）には南郊で明堂・辟雍・靈台・太学を起工し、並びに「五帝を四郊に兆した」。元始二年において長安には「戸八万八百、口二十四万六千二百」があった。新莽期は長安を常安に改め、地皇元年（20年）に南郊で九廟を立て、それとは別に社稷も立てた。

### 2. 漢長安城の調査と発掘の略史

漢長安城の考古学的作業は、1955年にインフラ整備に合わせて開始され、まず南郊の礼制建築遺跡に対する地表調査、ボーリング調査、試掘が行われ、1956年には北東郊外の閭家村遺跡で部分的な発掘調査が行われた。1956年10月には中国科学院考古研究所が漢長安城工作隊を設置し、南郊の大土門遺跡や第1～14号遺構の発掘と同時に、漢長安城を計画的にボーリング調査した。まず、城壁跡の地表調査、ボーリング調査、試掘が行われた。1957年には霸城門・西安門・直城門・宣城門の発掘調査が行われた。1961～1962年には城内の道路や主要な宮殿の分布に関する初歩的なボーリング調査が行われた。10年あまり作業は中断されたが、その後、1970年代後半に整地作業の過程で武庫跡が見つけ出され、その全面的なボーリング調査と重点的な発掘調査が行われた。1980年代に未央宮跡に対するボーリング調査と発掘が行われた。さらに長安城の西北部に対するボーリング調査が行われ、横門以南の大型建物跡が発見され、また横門大路の東西で版築の壁に囲まれた区画が見つかった。1990年代には城内各地で考古学的調査が行われ、発掘によって西北部の手工業工房区の実態が明らかになった。またボーリング調査を通じて北宮の位置と範囲が初歩的に確定された。全面的なボーリング調査と重点的な発掘調査により、桂宮跡

の基本的な状況が把握された。

2000年代においては、重点的に長楽宮跡に対して全面的なボーリング調査と重点的な発掘が行われた。さらに相家巷遺跡の発掘も行われた。また、十六国、北朝時代の長安城宮城跡を発見し、宮門跡の発掘調査が行われた。直城門と西安門に対する二度目の発掘調査が実施され、直城門大街の試掘が行われた。西南の郊外で沔水橋遺跡が発掘された。建章宮で1号建物跡の発掘調査が行われた。上林苑で昆明池遺跡がボーリング調査され、多くの離宮別館の遺構の発掘調査が行われた。

2010年代の前半には、主に「シルクロードの世界遺産登録申請」に伴って未央宮跡に対する再度のボーリング調査と発掘が行われた。また、城南で西安門外の建物跡が発掘された。建章宮跡において太液池跡がボーリング調査された。城北で厨城門外の渭橋遺跡が発掘された。2015年から2022年にかけて「上林三官」の一つである鐘官鑄銭遺跡に対するボーリング調査と発掘が行われた。また2018年から2022年まで北宮跡に対する重点的な発掘調査が行われた。2022年からは明光宮跡に対するボーリング調査が行われている。

### 3. 漢長安城の主要遺構

60年余りの考古学的調査によって、漢長安城の平面的な形状と規模、城壁と堀の構造、城門と城内大街の形状と構造、城内外の水系、未央宮・長楽宮・桂宮・北宮の範囲と配置、武庫の規模と建築の特徴、西北部の手工業工房の種類などを基本的に明らかにした。さらに南郊の礼制建築をはじめとする城郊の様子も次第に明らかになりつつある。

#### (1) 城壁と堀

漢長安城の平面形状は不規則であり、城壁は版築で築かれていた(図3)。その長さは東城壁6000m、南城壁7600m、西城壁4900m、北城壁7200mで、全長25700m、面積は約36km<sup>2</sup>である。東城壁は比較的直線的である(図1)。南側の城壁は、先に建てられた長楽宮と未央宮、および地形の状況に妨げられて、屈曲しているところがある。西側の城壁には1か所屈曲している場所があり、それは未央宮およびその西側を



図1 漢長安城の東城壁の霸城門北側(南西→北東)

流れる沔水の影響であろう。北側の城壁は渭河に近いので、南西から北東に向かって伸びており、屈曲している所も多い。城壁の基底部の幅は14~16mで、城門付近では壁幅が広がっているところもある。城壁西南隅の内外を試掘した結果、隅の上に角楼などの防衛施設が建てられていたこと、また隅の内側にも建物が建てられていたことが判明した。西城壁の外に発掘された堀の幅は約8m、深さ約3mであったが、他の城壁では幅数十mの堀がボーリング調査によって見つかっており、たとえば南城壁の西端の外側では、幅40~50mの堀が発見された。

#### (2) 城門

城壁の各面にはそれぞれ3つの城門が設けられ、合計12個の門があった。東壁には北から南へ、宣平門、清明門と霸城門があった。北壁には東から西へ、洛城門、厨城門と横門があった。西壁には北から南へ、雍門、直城門と章城門があった。南壁には西から東へ、西安門、安門と覆盎門があった。発掘された城門跡から、1つの門に3つの門道があり(図2)、門道の実際の幅は約6mであったことが判明した。門道間の隔壁の幅が異なるため、門の規模にも差があり、未央宮と長楽宮の宮門の向かいに位置する西安門と霸城門の隔壁の幅は14mあり、城門全体の幅は52mであった。他の門が幅32mであったから、それらに比べると、西安門と霸城門は壮大なものであった。また、東側の城壁に位置する宣平門・清明門・霸城門

には、城門両側の壁に突出部が存在し、瓮城のような構造になっていた。この点はこの城門と異なる特徴を示している。霸城門南側と西安門東側の城壁の内側には、馬道のような遺構が確認できる。霸城門の南と西安門の東およびその隔壁、また直城門南の城壁の内側にも付属の建物があり、これは城門の駐屯場所であろう。



図2 漢長安城の直城門跡（東→西）

### (3) 道路

12の城門のうち、未央宮と長樂宮に面した4つの門を除き、他の8つの門は城内を走る大路と繋がっていた（図3）。城内の大路は東西または南北に真っすぐ走り、計8本の道路からなっていた。そのうち最長なのは安門大路で全長約5500m、最短は洛城門大路で約850mであった。大路の幅は数十mで、文献によると、道路中央に皇帝専用の馳道があった。西壁の直城門につながる大路を試掘したところ、前漢中後期の道幅は約61.4mで、3道に分かれていることが確認できた。真ん中の道とその両側の道（南北方向に走っている）はどういう形で分けられていたかは未だ不明である。城壁の内側に壁に沿った道路が設けられていた。その幅は6～10m。外側にも城壁とほぼ平行する道路が発見された。

### (4) 水系

水の供給に関しては、城内は主に井戸水が使用され、また未央宮の滄池から開渠を通じて各区域に水が供給されていた。滄池の水源は西南部の沔水である。城外においては昆明池が主な水の供給源で、水路を通じて長安城方向に水を送っていた。輸送用の水路も城外における人工水系の重要な構成要素であった。排水に関しては、城内は道路両側にある溝で排水システムを構成していた。各区域の雨水や汚水はこれらの溝に流れ込み、城門の下の暗渠を通過して城外の堀に流れ込み、北へ向かって渭河に注ぎ込んでいた。

### (5) 城内の空間配置とその特徴

8条の大街によって城内の空間は11の区域に分割されていた。中部と南部には未央宮（武庫とその南に位置する「東第」と呼ばれる居住区域を含む）、長樂宮、桂宮、北宮そして明光宮が分布し、11の内の5つの区域を占めていた。桂宮と北宮の間は高級住宅区であった可能性がある。北西部の手工業工房と市は3つの区域を占めていた。北東部の2区域は庶民の居住区であった可能性がある（図3）。長安城は大きな規模を有し、整然とした道路を備え、計画的に空間配置されていた。複数の宮城と大邸宅で全体面積の3分の2が占められていた。城内と郊外は一体化して、多くの礼制建築がそこに分布していた。

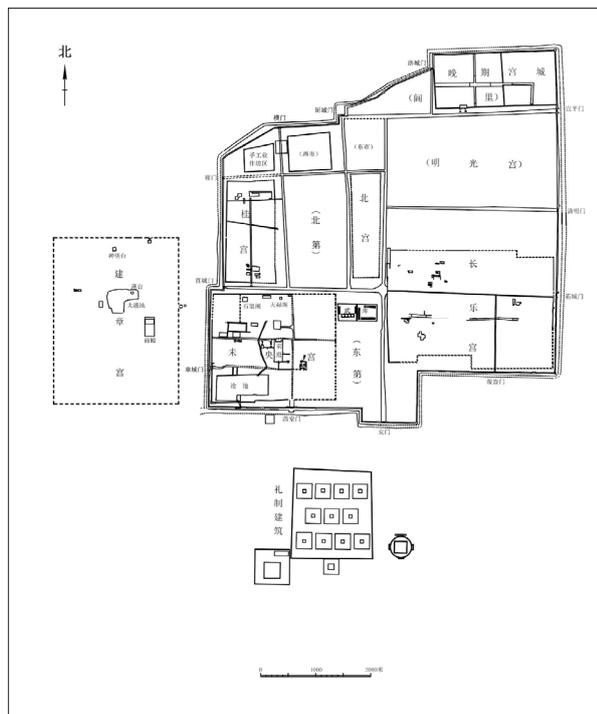


図3 漢長安城遺跡の平面配置図

### (6) 宮城の位置

未央宮は皇宮であり、城内の南西部に位置していたので、西宮とも呼ばれた。長樂宮は城内

の南東部に位置していたため、東宮とも呼ばれた。漢初、高祖劉邦は長樂宮を皇宮として使用し、恵帝以降の時代では太后がここに住んだ。桂宮は未央宮の北、城壁に近いところに位置し、后妃たちの住まいであった。北宮は、厨城門大路の東、安門大路の西、雍門大路の南、直城門大路の北のところに位置していた。ここには廃位された后妃が多く住んでいた。初歩的なボーリング調査によると、北宮の平面は南北方向に長い長方形をなし、南北長は約1710m、東西幅は620mであった。宮城壁は断続的に残存し、基底部の幅は5～8mであった。発掘された3つの建物跡の中で、一号建物跡は南西部に位置し、北宮の主殿であったと考えられる。文献の記載によれば、明光宮は長樂宮の北に位置していたので、清明門大街の北側地域を調査することが適切である。

(7) 未央宮

宮城の平面は正方形に近く、一辺の長さは2150m～2250m、全長は8800mで、面積は約5㎡あり、それは漢長安城の総面積の約7分の1を占めている。宮壁は版築で築かれ、基底部の幅は7～8mある。文献の記載によると、宮城の四方にはそれぞれ一つの門があり、そのうちの北門と東門には外側に門闕があって、それぞれ北闕・東闕と呼ばれていた。さらに若干の「掖門（小型の門）」が設けられていた。南の宮門と宮城の北壁にある門を発掘調査し、また西の宮門に対して試掘調査を行った。宮内に3つの主要道路があり、南北に平行して走る東西道路2本と、宮城の真ん中を縦に貫く南北道路1本があった。東西に走る2本の道路は、未央宮を南、中央、北の3区に

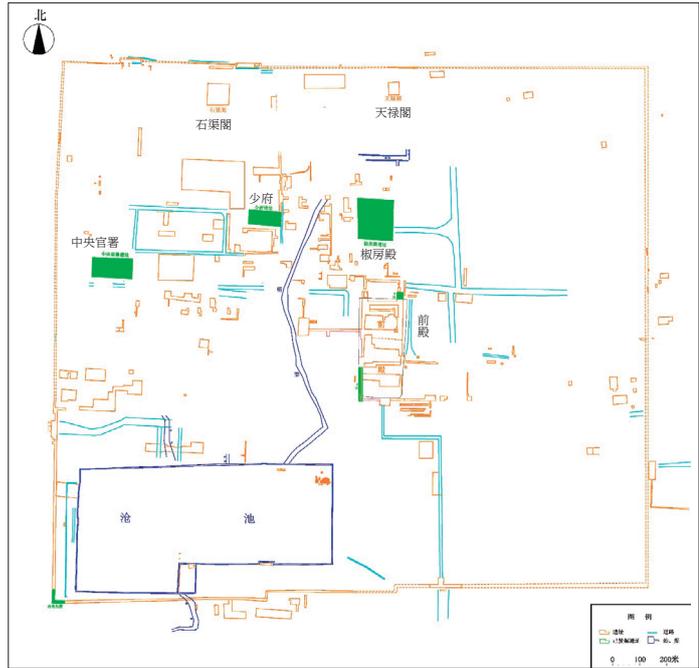


図4 未央宮跡の遺構配置図

区切っている。大朝正殿として機能していた前殿が中部に位置し、北部に位置する皇后の椒房殿と共に宮城の中核区域を形成していた。南部には滄池・漸台を中心とする皇室庭園区があり、滄池の水は開渠を通じて北上し、未央宮を縦貫していた。北部には中央官署や天祿閣と石渠閣などの文化施設が分布していた(図4)。1号遺構(前殿)は未央宮の中心建物であり、南向き、残存基壇は東西幅約200m、南北の長さは400mほどある(表紙写真)。基壇の南側は高さ約0.6m、北側の高さは約15mである。その南西角にある附属建物(A区)から木簡115枚が出土した。2号遺構(椒房殿)は前殿基壇から北へ350mのところにある。東西130m、南北148.75mで、そこは正殿・脇殿そして附属建物から構成されていた。3号遺構(中央官署)は前殿の北西に位置し、東西135.4m、南北71.2mで、大型の城壁で仕切られた閉鎖式院落建物であった。この遺構からは6万件を超える骨筭が出土した。そのほとんどに刻字があり、その主な内容はいくつかの中央官署と地方の工官による弓や弩などの武器生産に関する記録である。4号遺構も前殿の北西に位置し、東西109.9m、南北59mであった。その早い時期の建物跡から「湯官飲監章」などと読める封泥が出土しているから、ここは少府(或いはそれが所轄する官署)の跡であったと推測される。

(8) 長樂宮

長樂宮の南北の宮城壁は直線的ではない。一周の全長は1万m以上、壁の基底部の幅は5～9mで、12mを超える場所もある。面積は約6km<sup>2</sup>で、長安城の総面積の6分の1を占める。文献記載によると、宮城の四方にそれぞれ門があり、東門と西門の外側には闕があった。調査の結果、宮内に東西と南北に走る





のほかに市や倉などもあった。長安城とその周りに広がる郊外は、緊密に結びついた一つの総体であったといえる。

(14) 南郊礼制建築 (図10)

漢初に秦の社稷を廃して、漢の社稷が建てられ、その後、官社・官稷も建てられた。第13号遺構は漢の社稷跡であると思われ、官社・官稷は社稷と同じ場所にあったはずである。この遺構は長安城外の南西部に位置し、東西に長い長方形の版築基壇である。基壇の中央部の真北軸線上には未央宮の前殿跡が位置する。遺構は破壊がひどく、残存部分は東西240m、南北60～70mである。その空間配置は主要建物が真ん中にあり、その周りに庇あるいは廊屋が建てられていた。さらに8つの付属建物が存在した。版築基壇は秦代に築かれたものと考えられ、建物は前漢初期に建て直され、前漢の末期まで使用されたと見られる。

第14号遺構はおそらく王莽が建てた新しい社稷で、その位置は漢の社稷の南（既に廃棄された漢の社稷を含む）にあった。遺構は二重の壁に囲まれており、その平面は「回」字の形を呈していた。外側の壁は一辺570～600m、内側の壁は一辺273mである。内側と外側の壁には4面とも中央に門が設けられていた。壁内の空間の中央には建物跡が確認できない。

第13号・14号建物の北東に隣接した場所では、ひとまとまりの大型建物群が見つかった。それは計12基の建物跡からなっていた。第1～11号建物は方形の壁で囲まれた空間の中に分布していた。4面の壁の長さはそれぞれ東壁が1635m、西壁が1660m、南壁が1490m、北壁が1415mであり、壁には合計で14の門が設けられていた。11基の建物遺構では建物が南北に3列で並んでおり、北の列には建物が4棟（東から西の順で整理番号はF1～F4）、真ん中の列には建物が3棟（東から西へ順に整理番号はF5～F7）、南の列には建物が4棟（東から西へ順に整理番号はF8～F11）が確認された。第12号建物（整理番号F12）は、南壁の外側中央に独立して建てられていた。南壁からの距離は10m余り。12基の建物遺構は全て形式が同じで、いずれも中心建物の周りに壁が築かれ、壁の四方に門があり、そして壁の内側の四隅にはL字型の小型建物が設けられた。中心建物の平面は方形で、一辺55m（12号の中心建物は一辺約100m）の4面对称の形をなしている。壁の平面は方形で、一辺260～284mであった。この一組の建物群は「王莽九廟」であったに違いない。

大土門遺跡は第1～12号遺構の東にあった。これは前漢長安城の安門の真南からやや東寄りの場所にあたる。遺構の平面は外側が円形で、内側が方形を呈していた。建物遺構の主体部は、大きな方形土台（一辺が205～206m）の中央に位置する円形の版築基壇（直径62m）の上に築かれていた。その平面形は「亞」字の形を呈し、一辺は42m。建物の構造は複雑である（真ん中は方形の大きな版築基壇で、4隅にはそれぞれ方形の小型版築基壇が築かれて、その4面の内側には庁堂、外側には周回式テラスがあった）。建物主体部の周りには平面が方形の版築周壁がめぐらされ、その周壁は一辺235mで、壁の一面中央ごとに門が設けられていた。周壁の四隅の内側にはそれぞれL字形の付属建物もあった。周壁の外側には環状

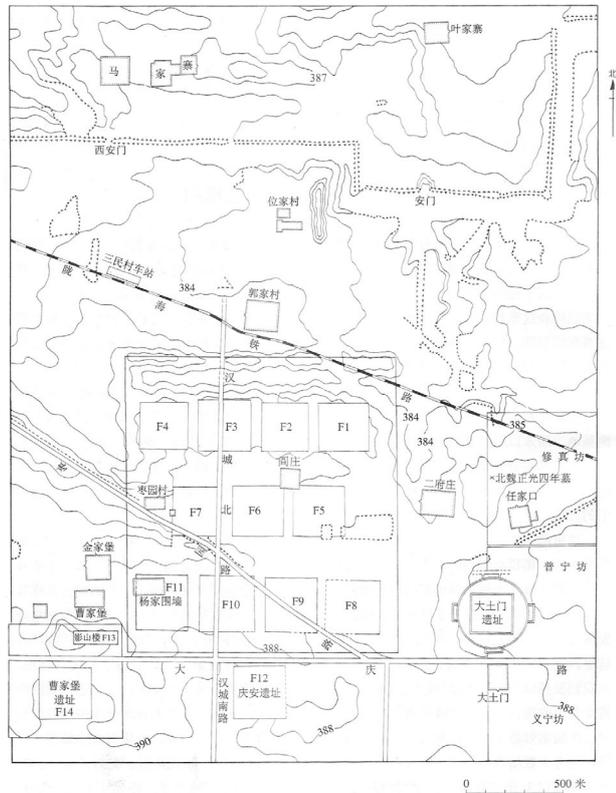


図10 南郊の礼制建築遺跡の分布図

の大きな水路が穿たれ、その直径は東西幅368m、南北長349mであった。この大きな水路の周壁の四門に  
対面する場所に、長方形に巡る小さな水路が連結していた。当該建物は辟雍に違いない。

#### 4. 漢長安城の沿革

後漢時代に、長安城の構造はほぼ変わらなかった。後漢末期に董卓が献帝を長安に移したことがある。三国時代に、長安は魏の五都の1つとして、西部経営の重要拠点となっていた。西晋時代に、長安城はまだ軍事的、経済的に重要な地位を占めており、それゆえ張方は恵帝らを引き連れて長安に至り、また愍帝も長安で即位したのである。この後、十六国時代の前趙、前秦、後秦、そして北朝の西魏と北周は皆長安を都とした。この時期の長安城は、前漢の長安城をそのまま踏襲したが、宮城の位置は北東寄りに移され、都市の構造には大きな変化があった(図11)。隋唐時代になると、漢の長安故城は新都の北部にある禁苑の一部となった。

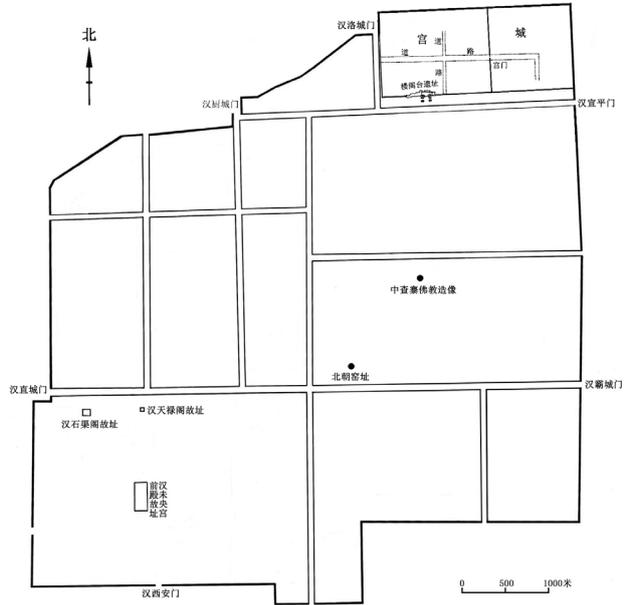


図11 十六国・北朝時代における長安城の平面配置略図

### 二. 秦漢都城の時代性

都城の時代性とは、時代と共に変化する政治社会的、経済的、文化的な要素が都城制度の上にも反映されているという見方で、それは一般的な表現で言うと「継承と創出の統一」である。継承というのは、前代の都城要素を借用したり継承したりすることで、都城における通時代的な共通性を指す。創出とは、継承を基礎として改造や革新を行うことである。これによって都城の時代的な個性と特徴が形成される。

#### 1. 戦国列国における都城の空間配置

戦国時代に周王城と列国都城の形状と構造はそれぞれ違っていた。空間配置上の大まかな特徴から当時の都城は「城中城」と「並列城」の二大類型に分類できる。

##### (1) 城中城

河南洛陽の周王城、陝西鳳翔の秦雍城(図12)、湖北荊州の楚紀南城(図13)、安徽寿縣の楚寿春城と山東曲阜の魯故城(図14)などがこれにあたる。この類型における空間配置上の特徴としては、城(大きな城壁で囲まれた区域)が一つしかなく、宮殿区は城中に位置し、一般的に宮殿区は複数あったが、中核的な宮殿区は一つの区域として周囲を囲い、結果として宮城を形成した。楚の紀南城はその一例である。

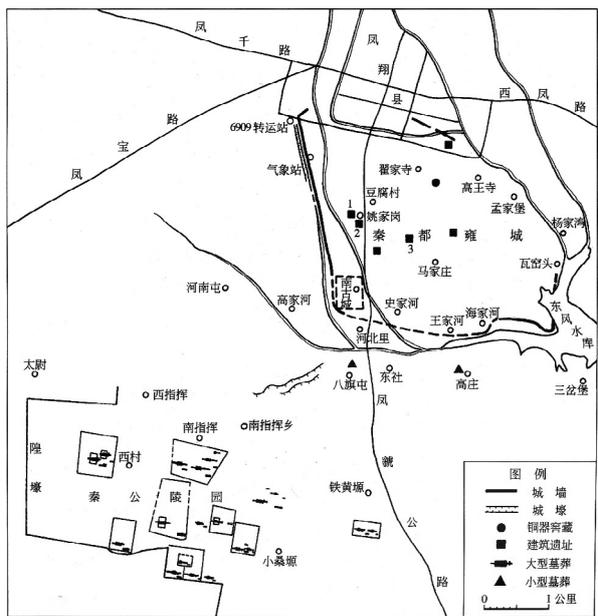


図12 陝西鳳翔の秦雍城遺跡の平面図(『中国考古学・両周卷』より)

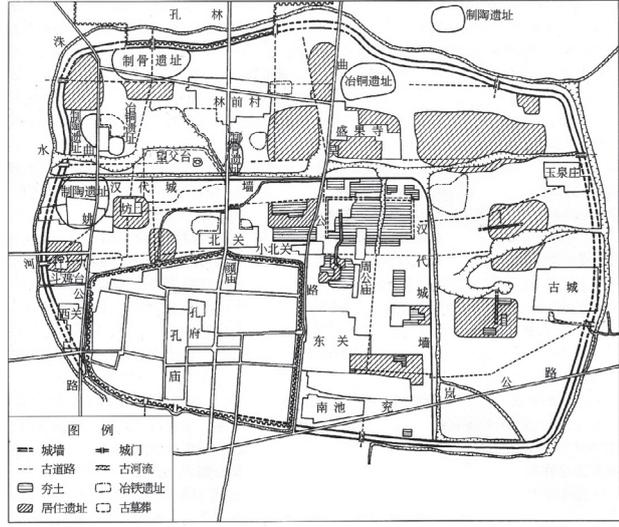
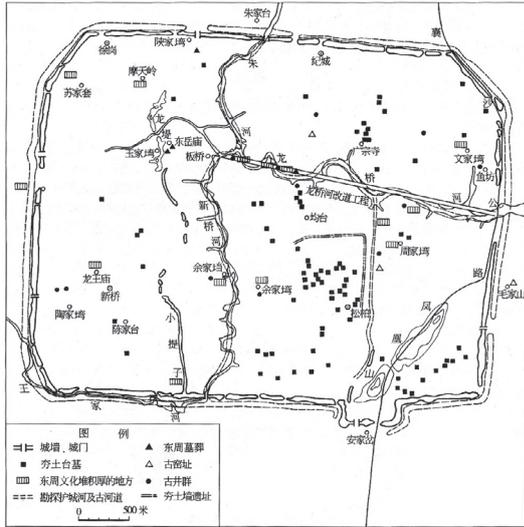


図13 湖北江陵の楚紀南城遺跡の平面図(『中国考古学・两周卷』より) 図14 山東曲阜の魯故城遺跡の平面略図(『中国考古学・两周卷』より)

(2) 並列城

河南新鄭の鄭韓故城(図15)、山東臨淄の齊故城(図16)、河北邯鄲の趙故城、そして湖北易県の燕下都(図17)などがこれにあたる。これらの城の空間配置上における特徴は、上下あるいは左右に二つ、あるいは複数の大きな城壁で囲まれた区域が並んでいて、その中の1つに宮室建物が設置され、あるいはそれを壁で囲んで宮城を形成した。たとえば、鄭韓故城の西城が挙げられる。他に趙故城のような、宮殿が「品」の形を呈する3つの小城に分散している場合もあった。

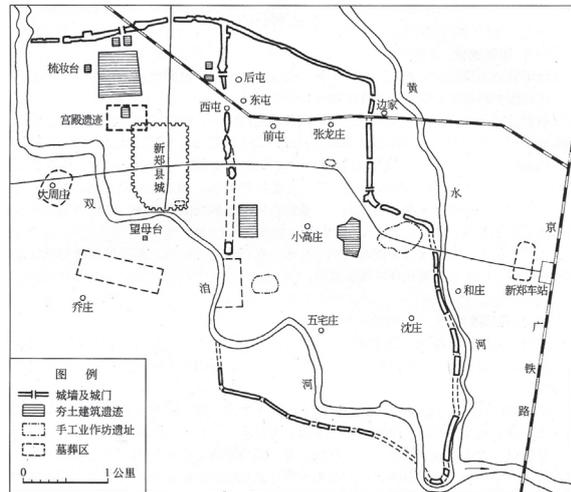


図15 河南新鄭の鄭韓故城遺跡の平面図(『中国考古学・两周卷』より)

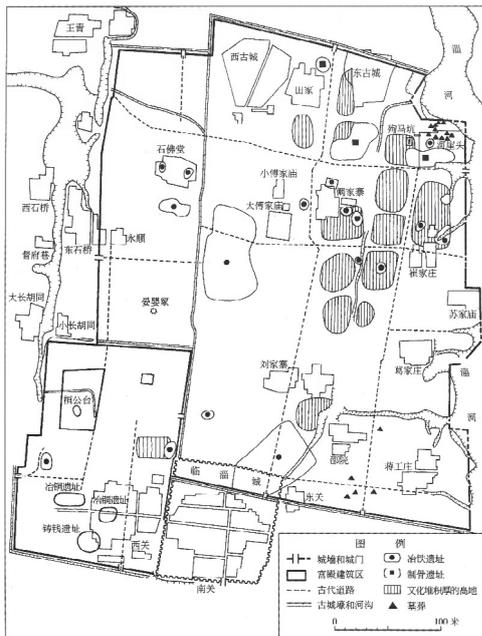


図16 山東臨淄の齊故城遺跡の平面図(『中国考古学・两周卷』より)

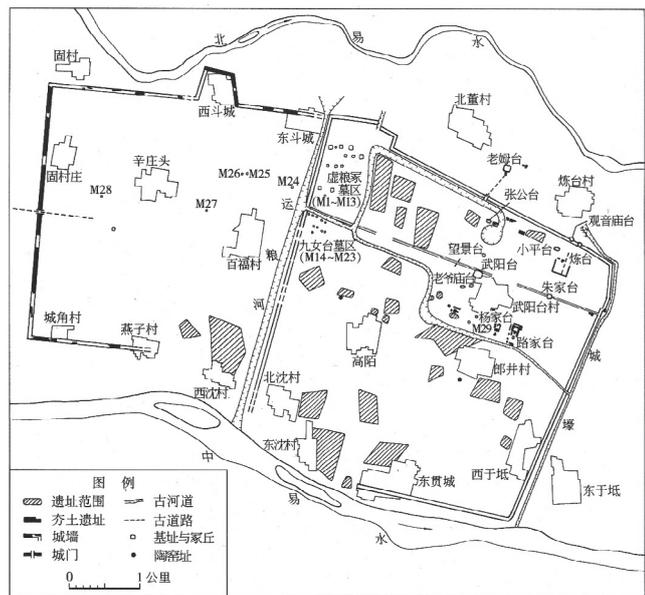


図17 河北易県の燕下都遺跡の平面図(『中国考古学・两周卷』より)

## 2. 秦漢都城の時代性—漢長安城の構造的配置について—

漢長安城は戦国都城の造営技術と構造的配置を継承し、それを創出することでできあがった都市である。

(1) 戦国都城の造営技術を継承し、川に隣接した場所を選んで城を建設した。これは河岸と周囲の地形を十分利用するためで、城壁は直線ではなく曲線で造成された。後漢時代の洛陽もその例外ではない(図18)。

(2) 城の規模は広大で、面積は36km<sup>2</sup>に達した。戦国時代最大の都市である燕下都(30km<sup>2</sup>余り)を大きく上回る巨大なもので、これは新興の大統一王朝の建設と適合している。城壁の各方向に3つの門があり、一つの門には3つの門道があった。城内の道路は整然とし、区割りは計画的であり、都城としての機能は完備しており、古代都市建設の新たな到達点であった。区割りがきちんと整っていたことは、その安全性と密切に関係しており、それゆえに都市の閉鎖性が醸成された。

(3) 戦国都城の「城中城」に属する空間配置類型の影響を受けて、革新的に城内に複数の宮城を設置するようになり、皇宮である未央宮は長安城南西部の最も高い場所に置かれ、西宮と呼ばれ、太后の住む場所である長樂宮は南東部に位置し、東宮と呼ばれていた。桂宮、北宮、明光宮は未央宮と長樂宮の北にあった。これらの宮城と数多くの高級邸宅地は、城内面積の3分の2を占めていたのである。こうした状況は都城の政治性を顕著に表すものであり、前漢政治の特徴を反映している。

多宮城制は、戦国列国の都城においてすでに原型ができあがっており、それは都市の中に複数の宮殿区域が存在するという状況を表していた。統一秦の都城は戦国秦の咸陽城をそのまま用い、城内に南、北宮が設置されていた。秦の封泥に「南宮郎丞」「北宮郎丞」とある所以である。後漢の洛陽城にも南北宮が置かれていたが、そうした宮は秦・前漢の時代にすでに存在していた。『史記』高祖本紀には「高祖は雒陽の南宮に置酒す」と記されている。『史記正義』が引用する『括地志』には『南宮は雒陽故城中に在り』と見え、『輿地志』も「秦の時に已に南北宮有り」と記録されている。このほかに、後漢洛陽城内には別に永安宮があった。この点から見ると、多宮城制は秦漢時代の都城に共通した特徴であり、漢長安城がその最たるものであった。

(4) 城外には一定範囲の郊区が設けられ、郊内には郷亭が置かれた。郊が備えていた性格は多様で、軍営(南軍、北軍)、宮室(建康宮、長門宮)、苑囿(博望苑、上林苑)、手工業工房そして祭祀用の礼制建築などがそこに設けられた。郊には多数の人が住んでいたため、倉庫と市も存在していた。このほかに郊は城内の住民や郊の郷亭の人々の埋葬地でもあった。

秦の都である咸陽は、渭河の北岸に築かれ、対岸の渭河南岸には宮殿(興樂宮、章台)、苑囿(上林苑)、宗廟(昭王廟、始皇帝極廟)、そして墓地などが置かれた。咸陽城の「渭南」とは、すなわちその南の「郊」ということができる。後漢の洛陽城外にも郊区があった。

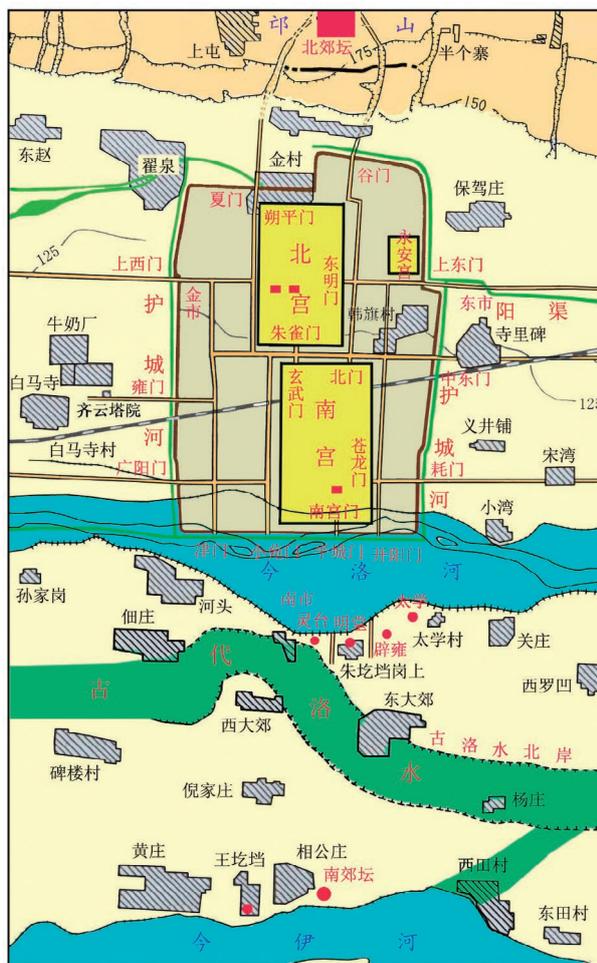


図18 後漢洛陽城復原略図(銭国祥氏作成)

(5) 祭祀の体系が整理され、郊外に大規模な祭祀空間が形成された。これら祭祀用の礼制建築は、郊の四方に広く配置されたが、特に南郊に集中して置かれた。社稷、宗廟そして天地、五帝の祭祀を通じて、支配者としての正統性と合理性を強調し、社会秩序を整えて、社会の安定を維持しようとした。こうした礼制建築は、秦から受け継ぐ一方、改新したところもあり、後世の都城の形状・構造・配置に直接的かつ重大な影響を与えた。

秦の宗廟と社稷は「渭南」にあり、同時に旧都の雍城一帯には伝統的な祭祀が残されていた。その中で最も重要なのは、白、青、黄、赤四帝の「雍四時」であった。漢長安城の郊外には宗廟と社稷のほか、長期の試行錯誤を経て、前漢末になると、天地の祭祀を甘泉と汾陰から長安の南北郊に移した。また、漢初に「雍四時」から発展した「雍五時」つまり五帝祭祀を西郊に移動した。さらに長安城の南郊には、明堂、辟雍、靈台、太学などの礼制建築が置かれ、新葬の時には南郊に社稷と宗廟、すなわち九廟も建てられた。

後漢洛陽城外の南北郊では天地が祭られ、四郊に五帝を祭り、南郊には明堂、辟雍、靈台と大学が置かれた。これらは前漢長安城の祭祀体系をそのまま直接継承したものである。

#### 参考文献

- 王仲殊「漢長安城城門遺址の発掘与研究」『考古学集刊(17)』科学出版社、2010年  
中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安漢長安城直城門遺址2008年発掘簡報」『考古』2009年第5期  
中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮1980~1989年考古発掘報告』中国大百科全書出版社、1996年  
中国社会科学院考古研究所『漢長安城桂宮』文物出版社、2007年  
中国社会科学院考古研究所『漢長安城武庫』文物出版社、2005年  
中国社会科学院考古研究所『西漢礼制建築遺址』文物出版社、2003年  
劉振東・張建鋒「西漢長樂宮遺址の発現与初步研究」『考古』2006年第10期  
劉振東「簡論漢長安城之郊」『考古与文物』2016年第5期  
劉振東「漢長安城的考古発現与研究」『百年中国考古学史(第三卷)』中国社会科学出版社、2021年  
劉振東「十六国至北朝長安城」『中国考古学・三国两晋南北朝卷』中国社会科学出版社、2018年

翻訳：趙 君儒(東北大学文学研究所・大学院生M2)、補訂：佐川 正敏(東北学院大学・教授)